

私は被爆体験伝承者の大石秀邦と申します。講話は約45分、残りの時間で皆さんからの質問や感想にお応えできればと思います。本日は次のような流れでお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。

これは(1945年8月6日午前8時15分)、広島市中心部に向けて原子爆弾が投下された日付と時刻です。こちらは(1945年8月9日午前11時02分)、長崎市の上空約500mで原子爆弾がさく裂した日付と時刻です。私たちの人生には、後から考えてみれば偶然であったり、あるいは運命的であったりする出来事がつきものかもしれません。投下から43秒後にさく裂をしたとされる原子爆弾ですが、8時15分の1分という時間にも一秒一秒の積み重ねがあり、そのわずか数秒の差が生死を左右したという事実も、被爆者である梶矢文昭さんの体験をもとにお話しをさせていただきたいと思ひます。

まずは「原子爆弾の被害の概要」についてです。今から(79)年前の1945年8月6日、現在のJR芸備線矢賀駅の上空約9,600メートルを飛行するアメリカ軍の爆撃機B29(通称:エノラ・ゲイ)から投下された一発の原子爆弾(通称:リトルボーイ)は、広島市の中心部、現在の島内科医院の上空600メートルでさく裂しました。なぜ、広島に投下されたのでしょうか。相生橋をめぐりて投下。もし

中国山地に源を発する太田川下流域のデルタ(三角州)上に形成された広島市は、平野部への出口の西と東に小高い山々が、南側には河口そして瀬戸内海が広がっています。また、市中心部から半径2~3キロメートルの市街地を有するという地理的な特徴を持っていました。それは、世界で初めて投下される原子爆弾の破壊力(エネルギー)や効果を測るうえで、適した地理だったと考えられます。さらに、1894年の日清戦争をきっかけに「軍都」(陸軍の拠点)として発展した広島(廣島)には、軍事関連の施設や軍需工場が多く、アメリカをはじめとする連合国の捕虜収容施設がなかったと思われていたことなども、最終的に広島が第1投下目標となった理由とされています。

1945年当時の広島市の居住人口は28~29万人で、その他、周辺郡部からの通勤者、火災の延焼を防ぐために建物を壊して空き地を作る作業(「建物疎開」)などに動員された大人と学生、また軍需工場などに徴用された朝鮮人労働者。さらに、軍人や軍関係者、留学生や捕虜などを合わせると、原爆投下時の広島市内には約35万前後の人がいたと推計されています。

運命の8月6日、原子爆弾が投下される午前8時15分までを振り返ってみましょ

これは再度調べ

う。原子爆弾（リトルボーイ）を搭載したエノラ・ゲイ号が科学観測機と写真撮影機を伴い、広島から約 2,740 キロメートル離れた太平洋のテニアン島の基地を離陸したのは日本時間の午前 1 時 45 分でした。それらに先立って九州の豊後水道方面から、アメリカ軍の気象観測機三機のうち一機が広島県の上空へ飛来したため、午前 7 時 9 分に警戒警報が発令されました。「広島の天候は良好で爆撃可能」とエノラ・ゲイ号に伝えた気象観測機はそのまま広島上空から飛び去り、午前 7 時 31 分に警戒警報は解除。ほどなくして、無警戒に近い日常生活が始まりました。その後、午前 8 時 6 分に福山市西部の上空、そして 8 時 15分には東広島市西部の上空を越えて西へと進むエノラ・ゲイ号を含んだ大型機 3 機が発見されていました。しかし、市民への警戒警報の発令には至らず、世界初の原子爆弾は、広島市中心部に向けて投下され、その 43 秒後にさく裂したのでした。日常の暮らしの中

広島に投下された原子爆弾は、ウラン 235 の原子核が連鎖的に分裂をするときに発生する巨大なエネルギーを利用したもので、爆発に伴って放出された「熱線」「爆風」そして「放射線」が複雑に作用し、人体や構造物に大きな被害をもたらしました。市街地のほぼ中央部上空で爆発したため、被害は同心円状に全市に広がりました。爆心地から半径 2 キロメートル以内の建物はことごとく倒壊・焼失、そして 1945 年 12 月末までに約 14 万人（誤差± 1 万人）の人々が原子爆弾を原因として亡くなったと推計されています。

原子爆弾のさく裂によって放出された「熱線」「爆風」「放射線」の威力について、順に見ていきましょう。

まずは「熱線」です。原子爆弾のさく裂によって生じた「火の球」の表面温度は、約 0.2 秒後にセ氏 7,700 度に達したと推定されています。ちなみに太陽の表面温度は約 6,000 度です。まるで「小さな太陽」が地上わずか 600 メートルの上空に突如現れたようでした。熱線を浴びた爆心地周辺の地表面の温度は 3,000 から 4,000 度に達したといわれており、爆心地から 1.2 キロメートル以内で、さえぎるものがないまま熱線を直接受けた人は身体の内部組織にまで大きな障害を負い、そのほとんどが即死または数日以内に亡くなりました。また、爆心地から半径 3.5 キロメートルまでの地域にいた人も、素肌の部分に火傷を負いました。鉄の溶け始める温度は約 1,500 度といわれていますが、原子爆弾が放出した熱線のすさまじさがわかります。

次に「爆風」です。原子爆弾は空中でさく裂した直後に高温・高圧の空気の壁といえる「衝撃波」を発生させました。その「衝撃波」の後ろから吹き抜ける爆風の風速は爆心地から 100 メートルの場所で毎秒約 280 メートル（ちなみに新幹線の秒速は約 70m）、その圧力は爆心地から 500 メートルのところでは 1 平方メートルあたり約 11 トンに達したといわれています。爆風で吹き飛ばされた人、倒壊した建物の下敷き

4/14 度ほもちゃん

になって圧死した人、下敷きのままその後が発生した火災で焼け死んだ人も多くいま<sup>す</sup>た。また、割れて飛び散ったガラス片などが体に突き刺さったり、大きな破片によって血管や神経を損傷したりすることもありました。原子爆弾が放出した総エネルギーを100%とすると「爆風」はその半分の約50%と言われており、その<sup>破壊</sup>影響力の大きさが伺えます。

そして、火薬を使った爆弾と原子爆弾の決定的な違いが「放射線」の放出です。核分裂そしてさく裂から1分以内に放出された放射線を「初期放射線」とよび、そのうち中性子線とガンマ線が地上に到達し、直接、人体に大きな影響を及ぼしました。また、放射線を浴びた土や金属はそれ自体が放射性物質となり、巻き上げられたチリやススなどの降下物とともに「残留放射線」を放出しました。放射線は、体の奥深く細胞にまで入り込み、白血球や赤血球の減少など血液の異常を引き起こし、骨髄など血液を造る機能を破壊しました。また、肺や肝臓等の内臓を侵すなど、深刻な障害も引き起こしました。爆心地から約1キロメートル以内で、さえぎるものがないまま原子爆弾の初期放射線を浴びた人は、致命的な影響を受け、その多くは数日のうちに死亡しました。

被爆直後から短期間のうちにあらわれた「熱線」「爆風」「放射線」などを原因とする一連の症状を「急性障害」といい、外傷や火傷以外に発熱・吐き気・下痢・出血・脱毛・倦怠感など、様々な症状が現れました。「急性障害」はその年の12月末までにほぼ終息をしましたが、「放射線」による影響はその後も長期にわたって様々な障害を引き起こし、被爆者にとってその危険性や不安は現在も続いています。2歳の時に被爆した佐々木禎子さんと「折り鶴」の実話については皆さんもご存知だと思いますが、禎子さんは、被爆から9年後にあたる12歳（小学校6年生）の時に急性骨髄性白血病と診断され、「折り鶴」へ託した願いもむなしくその翌年の1955年に亡くなりました。

原子爆弾の恐ろしさの一端についてお伝えしましたが、今から（79）年前それは確かに存在<sup>しました</sup>。

さく裂した世界初の原子爆弾。その「きのこ雲」の下を生き延びることができた人々や焼け野原となった広島市内へ捜索・救援で入った人々は、何を体験し、そして何を思い、考えたのでしょうか。今日はそのお一人である 梶矢 文昭さんの被爆体験についてお伝えしたいと思います。

梶矢さんは、1939（昭和14）年3月生まれ<sup>の</sup>（85）歳。被爆当時は6歳で、現在のマツダスタジアムに近い荒神町国民学校の1年生でした。ご両親そして二歳上のお姉さんらとともに広島駅の近くで暮らしていました。当時、都市部の小学生は、空襲

爆心地近く

から若い生命を守ること、そして、素早い避難や防火などを目的に、より安全な地域へと一時的に移住をさせられました。これを「学童疎開」とよんでいます。「学童疎開」には3年生から6年生の児童を学校ごとに避難させる「集団疎開」や個人的に親戚や縁者などに引き受けてもらう「縁故疎開」などがありました。一方、中学校や女学校などの生徒は「学徒勤労動員」に駆り出されました。原子爆弾の投下当日には約8,200人の生徒（主に1年生）が、戸外で、火災の延焼を防ぐために家屋を解体して空き地を作る「建物疎開」の作業などに従事していました。梶矢さんのお姉さんである小学校3年生の文子さんは、新学期に入り、お母さんの実家があった現在の北広島町へ「縁故疎開」をしていました。しかし、訳あって原爆投下前には自宅に戻っており、弟の文昭くんとともに自宅近くの大須賀分散授業所に通っていました。分散授業所とは、次第に激しくなる空襲から児童を守るため、より自宅に近い民家などに設けられた臨時の授業所のことです。広島市中心部のほとんどの学校で実施されました。

大朝の授業

ここからは、皆さんも、6歳の文昭くんの気持身になって、その体験談を受け止めてもらえればと思います。

運命の8月6日朝、警戒警報解除の通報を受け、きょうだいはお母さんに見送られ、爆心地から1.8キロメートルの距離にあった大須賀分散授業所に出向き、朝の掃除に取りかかっました。原子爆弾のさく裂直前、文昭くんは玄関付近で拭き掃除、そして、お姉さんの文子さんはバケツの水換えのため、奥の台所へと向かっていました。どちらが水を換えに行くか、事前に少し言い争いになりました。そのわずか数秒の屋内での移動が二人にとっての生死の分かれ目となりました。何かの気配を感じた文昭くんとものすどいは、掃除の手を止めて南側の前庭のちに目をやりました。その時「ピカーッ」の閃光を感じ、庭の八手の葉が真っ黒に溶けるのが見えました。直後に「ドゥーン」という爆風におそわれ、分散授業所の家屋は一瞬にして倒壊。きょうだいは柱や土壁の下敷きになりました。暗闇と恐怖のなか、助けに来てくれる人もなく、文昭くんはしばらく身動きをせずじっと耐えていました。次第に破れた屋根から外の光が漏れてくると、その方向をめざして死に物狂いで柱や土壁をくぐり抜け、崩れた屋根の上へと這い上っていきがりました。その時の土壁やわらの腐ったような匂いは今でも覚えているそうです。目の前にはすでに被災した人々が列をなして避難しており、文昭くんもその列に入りこみ加わり、ただただ、夢中で、がれきの道を裸足で逃げました。「1年生の6歳で、自分なりによう逃げたもんじゃと思います」と梶矢さんは当時を振り返って話されます。

ついで

ものを見る

の流れ

広島駅の西側付近から饒津神社横を流れる京橋川沿いの道に出た時、川岸には数えきれない被災者を、そして川面を漂う多くの死体を目の当たりにしました。また、対岸の白島方面には炎が上がっていました。見知らぬ大人たちについて懸命に避難を続けた文昭くんは、神社を越えて二葉山の中腹までたどりつきました。そこから見下ろ

ほとい

にぎう

の始め

流れ

逃げのび

そのと長い

川原

逃げ

す~~×~~広島市内は全面火の海となっていました。

夕方になって炎が衰えを見せると、避難していた人々は山を下り始めました。文昭くんも近所のおばさんに連れられて山を下り、家族が生きていれば避難しているであろうと思われる東練兵場（陸軍の演習場）へと向かいました。その途中でおばさんとはぐれてしまい、不安や恐怖のなか、一人になってお父さんやお母さんを探してさまよっていると、別の近所のおじさんが見つけてくれ、家族が避難している場所まで連れて行って~~もら~~ました。やっとのことで再会ができたお母さんの片目にはガラス片が突き刺さり、顔はガラスによる切り傷で血まみれで、その場にうずくまりながら「~~お~~ーん、~~お~~ーん」と呻~~き~~ていました。そのお母さんの前には、今朝、分散授業所で一緒に掃除をしていた文子さんの遺体が横たえられていました。文子さんは、分散授業所の台所付近で崩れた柱に~~胸~~を挟まれ、~~ほぼ~~即死の状態だったそうですが、分散授業所が炎上する前に、お父さんによって~~連れ~~出され、重い傷を負ったお母さんとともに広島東照宮と東練兵場が接する山手へと避難~~して~~いました。予期せぬ、そして残酷な死にもかかわらず、お姉さんの表情にはかすかな「ほほ笑み」が浮かんでいるように、幼かった文昭くんには見えました。その「ほほ笑み」は、梶矢さんご自身が年齢を重ねる中で「謎」の一つとして心に残り続けました。

梶矢さん家族は、「水を、水をくれ」という被災した人の呻き声が響き、多くの死体が横たわる地獄のような東練兵場で三日間を野宿で過ごしました。時に、救援隊や軍から、おにぎりや乾パンの差し入れがあったそうですが、悲惨な状況にもかかわらず、「整然とならんで差し入れを受け取る被災者の姿や乾パンの袋に残っていた金平糖のかけらの甘さが~~印象~~に残っている」と梶矢さんは話されます。その後、~~迎え~~に来てくれた親戚と一緒に母の実家へ避難し、しばらくそこで生活することになりました。親戚とはいえ、原子爆弾や放射線に関する知識が十分でなかった当時、「原爆症は~~感~~染する」といった憶測や偏見などで、納屋にムシロを敷いただけの厳しい生活が続きました。

その後、避難先の母の実家から広島市内へもどり、焼け跡に建てた小屋からの再出発となりました。再開した小学校はいわゆる「青空教室」で、進学した中学校には未だ校舎は無く、遠方の中学校への通学を余儀なくされました。梶矢家は経済的には苦しい状況でしたが、ご両親やきょうだいの支えによって、梶矢さんは高校・大学へと進学し、1952（昭和37）年に小学校の教師になりました。

原爆で大けがを負いながらもお母さんは94歳まで生き抜かれました。それでも毎年8月6日がやって来ると、お母さんは泣きながら手を合わせて拝んでいたそうです。仕事に就いた梶矢さんが30歳になった頃、あまりに「めそめそ」~~する~~お母さんの姿を見かねて、「お母さん、ええかげんにせいや、幾ら泣いたって死んだ者が生き返るこ

は 北本親阿大朝の 初めて  
とがなかろうがい」と叱りつけたことがありました。そうすると、お母さんは梶矢さんにお姉さんのことを話してくれました。それは、3年生になったお姉さんが「縁故疎開」で親戚の家に預かってもらっていた時のことでした。お母さんが着替えなどを持って実家を訪ねた際、お姉さんは「私も連れて帰って、連れて帰って~~ま~~」とお母さんのそばを離れ~~ませんでした~~<sup>なかつたそうです。</sup>。お母さんは何度も「だめ、だめよ」と言って諭しました。何とかお姉さんを説得してお母さんだけを乗せた帰りのバスが走り出すと、なんとお姉さんは懸命に~~その~~<sup>バス</sup>を追いかけてきたと言うのです。その必死な姿を見たお母さんは、バスを停めてもらい、お姉さんを迎え入れました。お母さんにすがりついたお姉さんは「うちゃ死んでもええ、死んでもええげ~~え~~お母さんと一緒にええ」と泣きじゃくりました。さすがにお母さんも「ようわかった。死ぬときは一緒に死のうね」と連れて帰ったのです。バスの中で安心して寝込んだ顔と原子爆弾で死んでいった時の顔が「いっしょじゃった」とお母さんは話してくれました。安全な疎開先から連れて帰ったことで、結果的に娘を死なせてしまったことに対し、お母さんは自分自身を責め、悔い続けていたのです。

木造の住宅内で被爆した人は、爆風による倒壊で押しつぶされて亡くなったり、建物の下敷きで身動きが出来ないまま、その後に発生した火災で焼け死ぬ人も多くいたこと、また、梶矢さんきょうだいの生死を分けたのは屋内の居場所だったことは先ほど話しました。ここからは、梶矢さん自身が被爆体験をお話しされる際にいつも登場する原民喜、そして私の父の被爆体験を加えてお話を続けさせていただきます。広島市出身の詩人で小説家の原民喜は、病気で妻を亡くした翌年（1945年）、40歳の時に、爆心地から約1.2キロメートルの距離にあった実家の便所内で被爆をしました。その後、倒壊を免れた便所から自力で脱出し、迫りくる猛火の中を、家族や多くの被災者らとともに広島東照宮へと避難しました。その場所で、目の当たりにした被爆の悲惨な状況を手帳に記すとともに「コハ 今後生キノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」（これは、今後も生き延びてこの悲惨な状況を伝えなさいという天の命令ではないだろうか）との生きる~~意欲~~<sup>んり</sup>決意を綴り、後にその体験を小説「夏の花」として発表しました。しかし、1951（昭和26）年に46歳の若さでその生涯を終えてしまいました。被爆者そして表現者として、生きることや心身の健康にどのような不安があったのかはわかりません。それでも、私たちは、残された彼の作品などで被爆の実相や被爆者の苦悩に近づくことができます。梶矢さんは、被爆体験の講話に臨まれる際には、原民喜が記した「コハ 今後生キノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」の言葉を思い起こしているそうです。

一方、私の父である大石 正文も同じく爆心地から1.2キロメートル、現在の縮景

園の正門付近にあった家の中で被爆しました。父は当時 14 歳で、広島商業学校（現広島商業高等学校）の 3 年生。8 月 6 日の月曜日は工場が休みで、学徒動員先（日本製鋼所）へは行かず、いつもより遅い朝食をとっていたときに被爆。台所勝手口の方へ飛ばされた体は、上り口の四角い空間にすっぽりと納まったそうです。その段差で体は守られ、倒壊した家屋から自力で脱出することができました。外にいた叔母さんは、熱線で背中から手足の裏全体に大火傷を負い、爆風に吹き飛ばされて頭に重傷（8 月 18 日死亡）を負いました。火災による嵐や竜巻が発生するなか、父や叔父らは重症の叔母を大八車に乗せて橋を渡り、避難所の東練兵場を經由して約 4 キロメートル先の親戚宅にたどり着きました。翌日、父は汽車と徒歩で実家へ帰宅した後、放射線による初期症状だったのでしょうか、数週間、高熱と扁桃腺の炎症に苦しみますが、次第に健康を回復していきました。

父は、自分自身の被爆体験について何かに書き記すとか、筋道をたてて話をすることとはほとんど無く、時々、酔いに任せて経験をしゃべり、「人間の人生はそんなもんじゃないんじゃ」と一方的に愚痴をこぼすぐらいでした。父は 2007（平成 19）年に肺癌で亡くなり、すでに（17）年が経過しています。「伝えてはみたいが、文字や言葉では語れない。できるなら思い出したくない、忘れてしまいたい」といった複雑な感情を抱えていたのではないかと私は思います。また、「被爆者健康手帳」は知り合いの方の勧めで、1969（昭和 44）年、38 歳の時に取得しますが、どこか後ろめたい気持ちを持っていたように私には思えました。

人にはそれぞれの生き方や在り方そして考え方がるように、被爆体験者にもそれぞれの思いや苦悩そして願いがあると思います。被爆体験者である梶矢 文昭さん、原 民喜、父の三者に面識はなく、年齢や立場も異なる存在ですが、京橋川を挟んで比較的近い場所で被爆し、たまたま、倒壊した家屋から自力で脱出できたこと、そして避難したルートやその途上で目の当たりにしたであろう被爆の惨状には重なるところが多くあると思っています。

最後に「ヒロシマをつなぐ」というテーマでお話をさせていただきます。梶矢さんは、1990 年代の中ごろまで、教師として被爆体験を語ることはあまりなかったようですが、校長となられた 1994 年頃から自らの被爆体験を語る機会が少しずつ増えていったそうです。小学校の低学年にも関心を持たせるために自ら絵を描いて、紙芝居風にして伝えるような工夫や改善を重ねて来られました。また、退職後は「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を組織し、証言活動を継続的に取り組んで来られました。さらに、2020 年から広島平和文化センターの被爆体験証言者となられ、自ら証言活動を続けられるとともに被爆体験伝承者の養成にも力を尽くしておられます。

梶矢さんはいつも被爆証言の最後に「三度目は許しちゃいけないのです」「平和は尊いぞ」と強く訴えられます。「広島・長崎に続く原爆投下は絶対にあってはならない」との思いや願いこそが、梶矢さんご自身の証言活動そして伝承者の養成活動を支えておられます。

現在、世界には (12,512) 発の核弾頭 (爆弾) が存在し、実際に配備されている数は (3,804) 発といわれています。また、核分裂による原子爆弾に対し、核融合による水素爆弾などの威力は最大で広島型原爆の約 1000 倍ともいわれています。予想される被害の大きさから「使えない兵器」ではあっても、それを持つことで攻められないといった「核抑止論」が核保有国の考え方になっています。さらに、2022 年のロシア・ウクライナ紛争や 2023 年のイスラエル・パレスチナ (ハマス) 紛争開始以降、劣化ウラン弾の使用や小型核など「使える核兵器」の議論が度々聞かれるようになっていきます。核兵器の開発や保有はもちろん、それによる威嚇 (脅し) や援助も禁止する「核兵器禁止条約」が 2021 年に成立 (発効) した一方で、最近の核兵器をめぐる国際情勢はたいへん厳しい状況にあるといえます。

多発する国家や民族の対立によって、核兵器廃絶への道は困難を極めています。あらためて私たちは、(79) 年前の被爆の実相に深く学び、原爆投下に至ってしまった歴史やその背景を正しく知ること。さらに、被爆体験者の願いを聴き、受け止め、それらを色々な方法で継続的に伝えていく活動こそが最も強い「抑止力」であること、また一般市民を巻き添えにする戦争や武力での対立に勝者などはないということ。をけっして忘れてはならないと思います。そして、私たちにできることを少しでも行動に移していくことが、被爆者の願いに答えていくことになると思います。

最後になりましたが、私たちの現在や未来は、天災や自然の力に対して無力な面もあり、時に「運命」として受け入れなければならないこともあるのかもしれませんが、しかし、核兵器の保有や使用、また、その前にある武力対立は「運命」ではなく「人為」であり「人災」です。絶対に避けねばなりませんし、避けることはできるはずです。

以上で私からのお話は終了させていただきます。何か質問や疑問がありましたらお願いします。

本日は被爆体験伝承講話にご参加いただきありがとうございました。